

学校適応の促進をめざしたソーシャルスキル トレーニングの実践 —情動過程を伴った社会的情報処理モデルに基づく 全校規模のアプローチ—

○大澤久乃 (岐阜県可児市立帷子小学校)

吉澤寛之 (岐阜大学)

キーワード: 学校適応, 社会的情報処理, 全校規模

Lewis et al. (1998) は公立小学校において学校規模のソーシャルスキルトレーニング (SST) を実施し、直接的、予防的な介入を行うことで、頻発する小学生の問題行動が減少することを明らかにしている。国内の学校適応の促進を目指した予防的・開発的な SST の実践研究においては、一部の学年での実施にとどまり、全校規模の研究はまだない。本研究では、情動過程を伴った社会的情報処理モデル (Lemerise & Arsenio, 2000) に基づき、児童の問題解決場面での認知的側面の特徴をアセスメントした結果と発達段階とを考慮した全校規模の SST カリキュラムを開発し、実践した。

方 法

1. 対象と手続き

岐阜県内の小学校 1 校において、平成 27 年 12 月に小学校 1~6 年生の計 382 名を対象とした事前アセスメント (表情認知, 手がかり一意図, 敵意帰属バイアス, 目標の明確化, 反応構成, 反応決定, 反応的・道具的攻撃性) を行った。平成 28 年度 1 年生 (男子 36 名・女子 40 名) については、4 月に教師評価用の子どもの行動チェックリスト TRF (Teacher's Report Form; 井欄他, 2001) の攻撃性の項目について児童個別に担任の回答を求めた。事後アセスメントとして、同様のものを平成 28 年 7 月に、フォローアップ測定として同年 10 月に 1 年生から 6 年生を対象に実施した。

2. SST の実践内容

筆者が考案した内容 (Table 1) を、全学年対象に 4 月から 7 月までの期間、各学級担任が週 1 回朝の活動 (15 分・計 8 回) で行うとともに、第一研究者が学級活動 (45 分・計 6 時間) で実施した。

結果と考察

2~6 年生については、介入前、介入後、フォローアップ測定時 (被験者内要因) における社会的情報処理指標および学校適応に関する指標の変化について、達成度、自己評価、他者評価の低・高群 (被験者間要因) それぞれを要因に加えた 2 要因分散分析を行った。また、発達差を考慮し、低学年 (2 年生), 中学年 (3・4 年生), 高学年 (5・6 年生) に分けて分析を実施した。介入効果が確認された結果の一部は、Figure 1・2 の通りである。1 年生については、TRF の攻撃性の変化について同様の分析を行った。

道具的攻撃性では、達成度、自己評価、他者評価低・高群の全てにおいて、敵意帰属バイアスでは、

中学年自己評価群別を除く全てにおいて、介入前より介入後及びフォローアップ測定時の得点有意に低く、攻撃性が低下したことが分かった ($p < .01$)。反応的攻撃性では、介入前より介入後の得点有意に低く攻撃性が低下したことが分かった ($p < .05$)。表情認知合計得点や手がかり一意図合計得点では、時期の主効果において介入前より介入後の得点有意に高く ($p < .05$) 介入実践の効果があつたと考える。1 年生については、介入前より介入後及びフォローアップ測定時の得点有意 ($p < .01$) に低く、介入後よりフォローアップ測定時の得点有意 ($p < .01$) に低かったことから、介入実践の効果が確認できた。反応的攻撃性、否定的な感情を表出せず行う主張的行動 (P), 表情認知の一部、手がかり一意図の一部など介入後の効果が確認できたが、フォローアップ測定時まで効果が維持できなかったものについては、介入実践の継続により改善が期待できるであろう。友好的目標設定では、中学年以上で介入後の効果が見られなかった。友好的目標設定は、その時々々の友だちとの関係性に大きく影響されるものであるため、今後は友だちとの関係性を構築する SST を継続することで改善の可能性があると考える。

Table 1 主な実践内容

学年	ステップ1・2	ステップ4	ステップ5	感情コントロール
1・2年生	表情認知 (怒り・幸福・嫌悪・悲しみ), 敵意帰属バイアス			不安のコントロール
3年生	表情認知 (嫌悪・恐怖・悲しみ), 敵意帰属バイアス	ポジティブな主張的行動	友好的目標実現	不安が生起する場面での言語の特徴とストレス対処法には多くの種類があることに気づき、将来の自分にとってよりよい対処法を選択することの大切さに気づく。
4年生	表情認知 (嫌悪・恐怖・悲しみ), 敵意帰属バイアス	同学年や異学年の仲間との様々なトラブルにおいて、自分にとっても仲間にとってもよい結果を予測する複数の言葉かけや行動の仕方を知る。	同学年や異学年の仲間との様々なトラブルにおいて、自分の言葉かけや行動が、仲間の考えや行動に影響を与えることに気づき、暴力や暴言でない適切な行動を選択する観点を知る。	怒りのコントロール
5年生	表情認知 (嫌悪・恐怖・悲しみ), 敵意帰属バイアス, 手がかり一意図			自分が怒っているときの顔の表情や言葉遣いの特徴を理解し、怒りの感情の不適切な表現方法に気づき、本格的な感情の適切な表現方法を知る。
6年生	表情認知 (嫌悪・恐怖・悲しみ),			

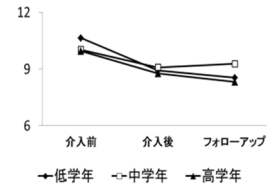


Figure 1 反応的攻撃性の変化

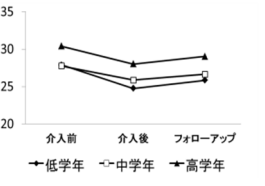


Figure 2 敵意帰属バイアスの変化